

氏名	藤井達矢	
学位の種類	博士(芸術)	
学位記番号	甲博制第35号	
学位授与の日付	平成26年3月22日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当(課程博士)	
学位論文題目	美術表現の時間性をめぐる考察	
作品テーマ	美術表現の時間性をめぐる考察 萼—UTENA—	
論文題目	美術表現の時間性をめぐる考察 ——飯村隆彦の捉える「間」から——	
論文審査委員	主査 教授	絹谷幸二
	副査 教授	横溝秀実
	副査 教授	豊原正智

内容の要旨

本論文は、申請者が、これまでの制作活動において常に考え続けてきた時間の概念について、実験映画の草分け的な存在であり、内外で高い評価を受けている映像作家、飯村隆彦(1937-)がニューヨーク・メトロポリタン美術館の委嘱(The Program for Art on Film)を受けて、磯崎新(テキスト)と小杉武久(音楽)と共に制作した映画『間：竜安寺石庭の時／空間(MA: SPACE / TIME IN THE GARDEN OF RYOUANJI)』(1989, 16mm, color, 16min)及び竜安寺石庭の詳細な分析を通して時間と美術表現との関係を明らかにし、さらに申請者の作品『萼—UTENA—』における「間」について論じたものである。

第一章では美術における時間と空間について、限定的に、即ち映画(『LOVE』(1962)『FLOWERS' ORGY』(1968))のフレームを写真(フリーズ・フレーム)として本の上に映像化した飯村の『ペーパーフィルム: LOVE and FLOWERS』(1970)における空間と意識のうちにある連続としての時間が後の「間」の議論の布石とすべく論じられ、ジャン・カスー(Jean Cassou, 1897-1986)の『近代芸術の状況』及びジョルジュ・フリードマン(Georges Friedmann, 1902-1977)の『技術と人間』を援用し、19世紀から20世紀にかけての急速な機械文明の発達による近代美術における時間・空間感覚の拡張について、映画の登場による影響と

共に新たな時間、空間の表現としての分析的段階の立体派及び未来派の「速度の美」が論じられる。このような近代の時間・空間概念との密接な関係を持ってその「屋台骨」(申請者)となったのがベルクソンのいう意識に直接与えられる「持続 (durée)」であり、それは次章で採り上げる映画作品『間』における飯村のバックボーンとなっているという。

第二章では映画『間：竜安寺石屋去の時／空間』の詳細な分析が行われる。飯村は日本映像学会第30回大会(2004年、東京工芸大学)において、「間」についてこの作品以前の1970年代から考えるようになったことを言い、そのコンセプトから一連の作品『MODELS リール、1と2』(1972)『MA (INTERVALS)』(1975-77)という内容的には『間』とは異なる抽象映画を制作しているため、申請者は、先ずそれらの分析を先行させ、飯村の言葉を引用し、そこでの時間の概念がベルクソンのいう「デュレ」であることを指摘し、彼はそれを東洋の時間概念に近いという。

申請者は『間』のDVDを入手し、その構造を詳細に記述した後、映像の構成(カメラの位置、移動、ショットのサイズ)と磯崎のテキストを分析する。最初と最後の固定ショットの間に石庭の東(左)から西(右)への移動ショットがサイズを変えて(望遠、標準、広角)三回行われる。その三回の移動ショットの間に4回の磯崎によるテキスト(詩)が挿入されている。この映像とテキストについて申請者は、ダニエル・シャルル(Daniel Charles, 1935-2008)の論文「スクリーンに持ちこまれた竜安寺」から「〈間〉との出会いの不可能性(目的、至高の主題)」と同時にそのことがこの映画に普遍性を与えているという一部批判的な引用をするが、申請者によれば、飯村の意図は「時間は空間と等しく」「〈物〉も〈距離〉も視点を移動すれば交換可能」であるという時間的な「間」と空間的な「間」が浸透し合う様を映像の実験として示そうとしたことにあるという。

申請者はさらに宮元健次の『龍安寺石庭を推理する』(2001)を援用し、「借景式庭園」「小堀遠州作」「遠近法の活用」という解釈から、仮説として詳細でユニークな『間：竜安寺石庭の時／空間』のエスキースを制作し、この飯村作品を再検討する。

第三章では申請者の創作者としての視点から、現代美術家の池田亮司(1966-)、河原温(1933-)、松澤宥(1922-2006)等の作品に量子論をロジックとする美術家の姿を見出し、ロジャー・ペンローズ(Roger Penrose, 1931-)等による意識に関する量子力学的アプローチである「量子脳理論」をヒントにベルクソンの「デュレ」、飯村のいう「間」に通底する時間・空間概念を自作『蓼-UTENA-』において現出させたとする。

「飯村隆彦の捉える「間」から」というサブタイトルに示されているように、かれの映画作品『間：竜安寺石庭の時／空間』の詳細な分析と独特な仮説を通して得られた新たな時間・空間を記号として定式化し、作品として表現することが時間・空間を扱う芸術家には避けられないとし、今日のデジタル技術がその表現の可能性を広げていると結論づける。

副査 豊原正智

作品について、この絵画・立体・映像のインスタレーションを構成する様々なメディアには圧倒されるが、観照者としては、それらを有機的に関連づけて、申請者のいう障子空間の「間」を特異な時空として体験することは必ずしも出来なかった。しかし、周りの映像空間に取り囲まれ、あるいは障子に映される具象的あるいは抽象的映像を見ながら移動するうちに過去から現在へと、刻まれる時間ではなく「意識としての時間」が体験された。それは、一定の時間移動すること、夥しい構成要素のためにわれわれの理性的な読解は放棄せざるを得なくなることで、この奇妙な時空の中にただ身を委ねるしかなくなるからではないか。独創的で、一定の完成度のある作品として評価したい。

論文について、論文の章立て、構成は妥当なものだと考えるが、各章の表題に対して、議論の内容が必ずしも十分ではない所が散見された。第一章の「美術表現における」という言葉は余り広すぎて曖昧であり、実際、その議論は19世紀から20世紀という限定的なものであった。その範囲での申請者の議論は、特に問題はなく正鵠を射たものであるために、用語の用い方にもう少し配慮が欲しい。また、第二章における飯村作品『間：竜安寺石庭の時／空間』は詳細にわたり、具体的であり、評価に値する。申請者が、この作品以外にも可能な限り飯村の過去の作品を入手し、その分析を補強しているからである。しかし、その後の石庭そのものの「間」に関わる仮説の議論は、やや、この論文の文脈から逸れている感が否めない。それは、石庭そのものの解釈の議論に深入りしている所為であり、必ずしも必要でない問題を削除し、「エスキース」のための最小限の議論にすべきである。この節は他のそれと比べ分量が多すぎる。

全体として、ベルクソンの「持続」、東洋思想、量子論的時間・空間等の問題は、非常に難しくまた必ずしも定説となっていない問題もあり、議論の掘り下げが十分ではない嫌いはあるが、それは今後に期待し、申請者の、自らの美術家としての創作における問題として敢えてこの困難なテーマに取り組んだことは一定の成果と共に評価したいと思う。

以上、今後の課題として残されたいくつかの問題点もあるが、指摘された点の多くは補足・訂正され、全体として一定の水準に透しているというのが審査委員全員の一致した見解であり、よって、論文「美術表現の時間性をめぐる考察」は博士(芸術)の学位申請論文に十分に値するものと認定する。